

1. 成 果

今回の相の谷1号墳出土遺物の保存処理及び再整理によって、新たに提示できた成果は下記の通りである。

- 青銅鏡の保存処理・資料化及び X 線写真撮影
- 鉄製品の保存処理・資料化及び X 線写真撮影
- 未報告埴輪の資料化
- 未報告中世土器の資料化
- 相の谷9号墓出土遺物の資料化及び X 線写真撮影

以下には各担当者が遺物の位置付けを中心に今回の整理成果についてその概要を紹介する。

2. 銅 鏡

二面の銅鏡については、考察編にてその位置付けを中心に検討したが、その概要を記す。

禽獣画像鏡は、破片で検出されたが、石槨内は攪乱を受けていることから、「破碎鏡」としての可能性もあるものの、土圧による破損、攪乱時の二次的移動による破損を想定した。今回の再整理で新たに得た知見としては、銘文の判読と、獣像表現の判明がある。銘文については従来「作竟真大」が判読されていた。保存処理に伴うクリーニングの結果、「氏」と「山」が新たに判読することが可能となった。その結果、「(龍?) 氏作竟真大(巧上有) 山(人)」という銘文を復元し、後半の「上有山人不知老」という七言句の一部を省略したものと考えた。獣像表現では、鳥像の羽根、嘴、頭部、脚部と獣像の脚部の表現がより明確となった。獣像は脚部と胴部の表現から虎の可能性が強いと考える。本鏡の類例として、福井・風巻神山4号墳鏡、福岡・野方塚原鏡、奈良・黒石山古墳鏡があり、日本出土鏡の中でも類例が少ない中国鏡である。近年の上野氏、岩本氏の研究成果を援用すると、本鏡は漢鏡7期の2世紀後半から3世紀初頭に製作されたもので、製作地は華北東部に求めることができる資料である。

鼉龍鏡(獣紋鏡)は、石槨のほぼ中央で、背面を上にした状態で検出され、完形で出土している。調査時には攪乱による二次的移動を想定しており、原位置を保っていないと考えられる。今回の再整理では、保存処理に伴うクリーニングの結果、内区主紋の四体の獣形が明確となり、それぞれには羽状の表現が認められ、嘴と思われる表現が三体で確認できることから、これら四体の獣形は鳥像を表現したものと理解した。紋様構成の特徴をまとめると、外区に捩紋(羽状紋)帯、内区外周に半円方形帯、内区主紋に鳥像をそれぞれ配することといえる。本鏡の類例としては、外区に捩紋(羽状紋)帯を有する資料(鼉龍鏡・捩紋鏡・獣紋鏡・神像鏡)が10数例、内区主紋に鳥像を有する獣紋鏡が10数例確認できるが、外区・内区の紋様構成が一致する資料は確認できない。鼉龍鏡と捩紋鏡の関連性の検討から外区に怪鳥紋帯を有する鼉龍鏡をモデルに本鏡が製作されたと想定した。その結果、本鏡の製作年代は、上限を最古の鼉龍鏡とされる雪野山古墳2号鏡と考え、雪野山古墳の築造年代から前期前半以降として位置付けることとしたい。

(富田)

3. 埴輪

本古墳出土の埴輪資料には、円筒埴輪、壺形埴輪のほか、朝顔形埴輪の可能性のあるものが認められ、各種埴輪の様相も単純ではないことが明らかとなった。詳細は考察編に譲りたいが、ここでは埴輪自体の年代的位置付けや、その歴史的背景について改めて触れておきたい。

円筒埴輪の形態的特徴は、同時期の県内での比較検討が困難なため不明な部分も多いが、竹管文や線刻鋸歯文などの文様構成および形状に多様性が認められ、非常に薄い器壁で、口縁形状に「都月系埴輪」の特徴を残すことなどから、概ね古墳時代前期中葉の年代観を与えることが可能と考える。

朝顔形埴輪の存在については、壺と器台の結合形態を示すと思われる破片（大きく屈曲する受け口状突帯）の確認により、その蓋然性が高いことは既に述べたが、そのモチーフは大和をはじめとする畿内にあり、製作段階で何らかの情報を入手し得たことを示す好材料である点で評価できる。

壺形埴輪の製作については、「擬頸部分割成形手法」の採用などの諸要素において、東四国（讃岐・阿波）の影響を多分に受けた個体であることが確認された。また、二重口縁に加え、単純口縁の広口壺形態を呈する個体が新たに確認でき、その数量も一定量で墳丘全体に配置された可能性が高い。

また、同時期の県内の埴輪資料については、現在のところ明確な資料が確認できないが、相の谷1号墳資料は、瀬戸内周辺部で同時期に発生した初期埴輪の一つとして採用されたものであり、畿内との関わりはもとより、隣接する東四国地域との密接なネットワークの中で各種埴輪は製作され、古墳祭祀の一属性として取り込まれたものと考えられる。つまり、壺形土器副葬の伝統的な墳墓祭祀の段階から脱却した、円筒埴輪および壺形埴輪の多量圍繞という新たな埴輪祭祀の採用という事実は、一時的な生産体制ではあるものの、その後の在地での埴輪生産において極めて大きなインパクトを与えたことは間違いなく、県内の埴輪研究における出発点として十分に評価できる。

(山内)

4. 中世土器

中世の遺物は、墳丘や石室内から数十点出土しているが、そのうち器形がわかるものについて14点を図化した。出土状況について、「相の谷古墳群調査概報」（正岡 1985）によると、「(墳丘)第2段目の両側のくびれ部には幅25cmの溝があり、土師器の杯、鉢、三脚付鍋などを出土した。時期は平安時代後期～鎌倉時代のものである。この時期に祭祀が行われたものであろう」という記述があり、土師質土器皿や杯、羽釜が部分的に並んだ状態の図面が掲載されている。また調査写真のなかにも羽釜や土器の出土状況写真があり、羽釜の側には湯築城跡A-2タイプの土師質土器杯が出土していることがわかる。このような出土状況から墳丘上で土師質土器羽釜と土師質土器皿杯を用いた、何らかの祭祀を行っていたことが推測される。

今治平野の16世紀代の資料は乏しいものの、相の谷1号墳から出土している中世の土器の器形は今治平野のものとは異なり、むしろ松山市湯築城跡出土の中世土器と類似している。柴田氏の湯築城跡出土土器に関する研究成果（湯築城跡 1999年）を援用すると、相の谷1号墳出土土器の年代観は16世紀中頃と推定される。土器の特徴から河野氏との関連が想定される資料群として注目される。

(石岡)

5. その他の遺物

武器 剣9点、刀2点、刀剣破片10点の合計21点を図化した。石槨東側壁沿いの中央部より北側で直刀、剣の破片が出土しており、原位置に近いものとされている。西側壁沿いの中央より少し北側では、側壁とも破壊されており、刀、剣が破損し、散乱した状況で検出されている。中央より南側では壁に沿って工具とともに鉄剣などが検出されており、これらは原位置に近いものとされている。出土状況と残存する資料を照合することは困難であるが、剣（第5図1）は、調査時の出土状況写真（図版2）から石槨東側壁沿いの中央部より北側で原位置を保つ資料と判断できる。このような出土状態から、これらの武器の大半は棺外に副葬された資料と位置付ける。

時期比定を確認できる要素としては茎部と関部があるが、両部分を確認できる資料は剣では第5図1・第6図5の2点、刀では第7図10の1点である。剣2点は、池淵氏の剣の分類（池淵 1993）の直茎（長）／ナデ角関直茎に相当する。刀（第7図10）は白杵氏の鉄刀の分類（白杵 1984）の一文字尻直茎グループに相当する。これらの資料は、4世紀代に比定することが可能なものと考えられる。なお、乱掘のため、副葬された武器の組成を復元することはできないが、鈴木氏の前期古墳出土の武器組成分類（鈴木 1996）では、刀剣類を多量（4本以上）にもち、鏃をもたないⅡa類に属する。

土師器 石槨内から出土した壺形土器片2点（小型広口壺と直口壺）を図化した。2点ともに細片であり、その年代を特定するのは困難であるが、近隣での調査資料と比較し、年代検討の参考とする。1994年に発掘調査された相の谷古墳群杉谷支群2号墳（藤田編 1995）出土土師器と比較したところ、胎土は精製したもので、類似しているが、器形は異なり、2号墳出土資料（布留式新相併行）の方が後出する要素が多く、本墳出土資料は、前期3（柴田 2006）前後に位置付けることが妥当であると考えられる。

円錐形銅製品 石槨の中央部より南側で出土している。全長4.1cm、最大幅1.2cm、底面の厚さ0.8mm～1.2mmを測る。石突の可能性も考えられるが、現在のところ、類例が検索できないことから、石槨内の攪乱時に混入した中世以降の資料と考える。

（富田）

6. まとめと検討課題

これらの遺物の検討から本古墳の位置付けを明確にするとともに、検討課題を列挙し、まとめたい。今回の再整理では、未報告の埴輪資料を報告した成果は大きく、本古墳の築造年代を検討する上では重要な指標となる。円筒埴輪・壺形埴輪・朝顔形埴輪の各様相とその共伴関係から、古墳時代前期中葉の年代観が提示されている。また、その技術系譜を円筒埴輪を畿内に、壺形埴輪を東四国系に求められることを明らかにしたことは、本墳の築造背景を検討する上でも重要な要素と考える。また、墳丘各部での出土傾向の検討から埴輪配列の一端を明確にしたことも成果の一つである。

副葬遺物では、銅鏡の位置付けを近年の研究成果に基づき検討したが、禽獣画像鏡・鼉龍鏡（獣紋鏡）はともに、類例が少ない資料であり、二面ともに鳥を内区主紋のモチーフとしていることが注目される。当時の葬送儀礼や宗教意識の一端を示す可能性があると考えられる。副葬遺物の組成から本古墳の年代を特定することは乱掘を受けているため、困難であるが、倭鏡の編年研究からは前期前半に位

置付けることが可能である。なお、畿内地域を中心とした副葬遺物の組成研究を援用する方法ではなく、四国及び瀬戸内海沿岸地域の前期古墳の相対年代を視野に入れた検討が必要であると考え。また、これらの副葬遺物を全長80mクラスの前方後円墳の副葬遺物として評価する時、乱掘を受けているものの、その品目からは厚葬されているとはいいがたい状況にある。その評価については、県内及び四国・瀬戸内海沿岸の前期古墳との比較が必要であるが、今後の検討課題としたい。

中世土器の検討では、16世紀中頃に墳丘部において土師質土器羽釜と杯皿を用いた祭祀行為が行われたことが明らかとなった。また、竪穴式石槨内から出土した青花碗の破片から16世紀以降に石槨内の攪乱があったことが明確になった。

検討課題としては、今回は検討対象としなかった遺構の再検討がある。1次・2次調査では、墳丘の西側のみが発掘調査されており、東側と前方部斜面はトレンチ調査のみで、墳丘の端部や形態は明確でなく、墳丘規模や墳丘構築過程を明確にできていない。また、墳丘に配された葺石についても、墳丘測量図への記載が無く、墳丘の再測量を含めた継続した調査が必要と思われる。

竪穴式石槨の調査では、全長7.1mと長大な規模を有することが判明しているが、基底部の構造や構築過程の復元など、不明な部分が多い。調査時に撮影された写真や作成された図面から再検討することが必要と考える。

以上のように、出土遺物を中心に本古墳の位置付けを検討したが、全長80m前後の二段築成の墳丘部に葺石を配し、初期の円筒埴輪・壺形埴輪・朝顔形埴輪を配置し、長大な竪穴式石槨を有する前方後円墳は、県内では本古墳のみであり、その成立や造営基盤を明確にすることが今後の検討課題と考える。

(冨田)

7. 相の谷9号墓出土遺物の位置付け

9号墓出土遺物については、1号墳の関連資料として、1号主体出土遺物（銅鏡）と2号主体出土遺物（武器・工具）を資料化した。これらの出土遺物の位置付けを検討する。

1号主体出土遺物

破鏡2点と勾玉1点、管玉2点、ガラス小玉17点である。破鏡2点は、内区主紋帯から外区・縁にかけての破片で、穿孔が認められる。内区主紋はほとんど残存せず、内区外周から外区の紋様構成から、細線式獣帯鏡である可能性が高いと考える。岡村氏の漢鏡編年（岡村 1993）の漢鏡5期に位置付けることができる。勾玉・管玉・ガラス小玉は、時期を特定する要素を欠くが、破鏡とともに土師器壺・高坏、鉄鏃、ガラス小玉、管玉が出土した高橋仏師I遺跡 SM-01の管玉、ガラス小玉と大きな相違はなく、弥生時代的な要素も認められないことから、高橋仏師I遺跡とほぼ同時期の前期1（柴田 2006）に前後する時期に位置付ける。

2号主体出土遺物

鉄剣1点と鉞1点が現存する。鉄剣は全長24.8cmの短剣で、池淵氏の分類（池淵 1993）の直茎Cに相当し、前期に位置付けることが可能である。鉞は、古瀬氏の分類（古瀬 1991）のIIa類に相当し、弥生時代後期から古墳時代にかけて認められるが、前期に位置付けることも可能である。

以上の1号主体・2号主体の出土遺物の検討からは、9号墓は前期前半に位置付けることが可能であり、相の谷1号墳より先行する墳墓と考える。

(富田)

8. 赤色顔料の分析

本墳に関連する赤色顔料としては、銅鏡及び埴輪に付着している赤色顔料と調査時に採取された赤色顔料のサンプルが残存しているが、今回の報告にあたっては、これらの分析は実施することができなかった。なお、一部のサンプルについては、愛媛県工業技術センターの協力・指導により、分析調査を実施したので、その結果と課題を記す。

同センターの所蔵の(株)日本電子社製 JXA-8900に波長分散型分光器を連動させた X 線マイクロアナライザーを使用し、下記の方法で、①1号墳内部主体出土サンプル、②9号墓サンプル、③1号墳出土甕龍鏡片付着サンプルを分析した。なお、分析にあたっては仙波浩雅氏(同センター主任研究員)にご指導いただいた。

(1) 調査方法

ピンセットを用いて、赤色顔料を削り取り、分析試料とした。その後、カーボンテープに載せた試料にカーボン蒸着を施し、X線マイクロアナライザーを加速電圧15Kvの条件下で使用し、試料が「水銀朱」か「ベンガラ」かを判別するポイントとなる Hg (水銀) と Fe (鉄) の存在を調査した。

(2) 結果

①1号墳主体部サンプル

検出元素に Hg が認められず、Fe が認められることから、ベンガラの可能性が考えられる。

②9号墓1号主体サンプル

検出元素に Hg が認められず、Fe が認められることから、ベンガラの可能性が考えられる。

③1号墳出土甕龍鏡片サンプル

検出元素に Hg が認められたことから、水銀朱あるいは水銀朱を含む赤色顔料が使われたことが考えられる。

(3) 課題

今回の分析では、赤色顔料の原料の一部を特定することができ、1号墳主体部サンプルでは朽津氏(朽津 1996)によって分析された1号墳主体部床面の赤色顔料と同じベンガラが検出された。今後は、蛍光 X 線分析装置での分析及び、周辺部での検出資料との比較が必要であると考えられる。

(富田)

【参考・引用文献】

- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』No.1 鳥根県古代文化センター
- 臼杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 梅本康広・森下章司編 2001『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ 前方部副葬品研究篇』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館
- 朽津信明 1996「愛媛県今治市の古墳の赤色顔料について—微小部 X 線分析法による分析から—」『遺跡』第35号 遺跡発行会
- 柴田昌児 2006「伊予における出現期古墳の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 鈴木一有 1996「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究 考察篇』八日市市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野良一・柴田圭子編 1999～2000『湯築城跡』第1～4分冊 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 藤田義之編 1995『相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣
- 正岡睦夫 1985「相の谷古墳群調査概報」『遺跡』第28号 遺跡発行会

【付記】

本目録の作成にあたっては、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター及び同センター山内英樹氏の多大なる協力を得た。特に山内氏の助力が無ければ、本書の主体となる埴輪の整理成果は掲載することができなかった。明記して深謝申し上げます。

更に、約40年前の調査時の様子についてご教示いただきました正岡睦夫氏をはじめ、調査に関係された方々に深謝申し上げます。

(富田尚夫)